2024年度大学入学共通テスト概況分析

河合塾
2024/02/06

このほど、大学入試センターから2024年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の実施結果が発表され、受験者数、科目別平均点などが判明した。能登の震災の影響が大きかった北陸の受験生には追試が許可されるなど、大学入試センターによる柔軟な対応がなされた。昨年度入試は、生物の難化による得点調整が実施されたが、本年度は、対象科目間で大きな平均点の差はなく、安定した難易度になった。以下、今年の共通テストの概況を振り返る。

志願者数・受験者数は減少
18歳人口減の影響

2024年度共通テストは1月13・14日の２日間にわたり、全国668会場で実施された。

今年度の志願者数は491,914人（前年比96.0%）、受験者数は457,608人（同96.5%）となった**＜図表１＞**。今春の高校卒業見込者は前年から３%ほど減少する見込みで、共通テスト志願者数・受験者数の減少はこれにともなうものである。今年は一部都心部でも雪が降るなどしたが、志願者のうち実際に受験した者を示す受験率は93.0%と上昇した。

なお、今年の追試験の受験許可者数は、1,629人と昨年の半数以下となった。事由をみてみると、インフルエンザなど疾病が主要因であった。追・再試験は本試験の２週間後の1月27・28日に実施され、1,435人が受験した。

＜図表２＞は受験科目数別の受験者数の推移である。主に国立大志望者が受験する７科目以上は98.8%とほぼ前年並みであった。一方、４～６科目の受験者数は、前年比93.8%、私立大専願者が中心となる３科目以下の受験者数は、同93.0%といずれも減少率は高くなった。

2024年度共通テストの受験者数は、最後のセンター試験であった2020年度と比べ、７科目以上で92%、4～６科目で83%、３科目以下で78%と少数教科で減少率が著しい。私立大専願者の共通テスト離れがうかがえる。

＜図表１＞センター試験・共通テスト　志願者数・受験者数推移

年度	志願者数	受験者数			受験率
		総数	本試験	追試験 再試験	
2015	559,132	530,537	530,177	360	94.9%
2016	563,768	536,828	536,659	169	95.2%
2017	575,967	547,892	547,391	501	95.1%
2018	582,671	554,212	553,762	450	95.1%
2019	576,830	546,198	545,588	610	94.7%
2020	557,699	527,072	526,833	239	94.5%
2021	535,245	484,114	482,624	1,490	90.4%
2022	530,367	488,384	486,847	1,536	92.1%
2023	512,581	474,051	470,580	3,471	92.5%
2024	491,914	457,608	456,173	1,435	93.0%

※大学入試センター資料より
※受験率は受験者数（総数）／志願者数

＜図表２＞ 共通テスト　受験科目数別の受験者数

受験科目数	受験者数		前年比
	2023年度	2024年度	
７科目以上	276,075	272,845	98.8%
４－６科目	84,594	79,374	93.8%
３科目以下	113,382	105,389	93.0%
合計	474,051	457,608	96.5%

※大学入試センター資料より
※理科の基礎を付した科目は２科目で１科目とする

共通テストの出題
概ね安定した難易度だったが、問題分量に注意

４年目の実施となった今年の共通テストだが、従来の出題傾向から大きな変化はなかった。複数資料の提示、日常や学習場面を中心に問題解決を題材とした出題、および教科固有の「思考力・判断力・表現力」をより深く問うというコンセプトは継続している。

日常生活を題材にした出題では、「数学Ⅰ・数学A」で電柱の高さと影の長さの測量について考察する問題が出題された。「化学」では解熱鎮痛剤や抗生物質などの医薬品が素材となるなど、身近なトピックからの出題が随所でみられた。

また、本試験では初めて連動型問題が出題された。連動型問題は、最初の設問の解答により、次の設問の解答が変わる問題で、「世界史Ｂ」で出題された。なお、「国語」では今年も「実用的な文章」は出題されなかった。

一方、かねてより指摘されている問題分量であるが、日常の事象を意識した場面設定や複数資料を提示することでページ数がさらに増加した教科・科目も見られた。とくに、「化学」の７ページ増をはじめ、「数学Ⅰ・数学A」や「生物基礎」「政治・経済」で３ページ増となった。７科目受験した場合の問題冊子のページ総数は、センター試験時と比べ約3割増となっている。

科目別平均点の変化
英語で高得点層が減少

＜図表３－１＞は大学入試センターが公表した共通テストの主な科目の平均点の一覧である。「国語」「生物基礎」「生物」「地理Ｂ」などで平均点が上昇した。一方、「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」「日本史B」「政治・経済」などで平均点がダウンした。英語ではリーディングで平均点がダウンしたものの、リスニングでアップしたことで、英語全体では前年並みの平均点となった。

＜図表３－２＞は河合塾が実施した自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の英語リーティングの得点分布である。昨年と比較して平均点は-2.27点とややダウンした程度だが、得点率８割以上の受験者は前年比69%と大きく減少した。昨年の文章量も過去最多のワード数であったが、今年はさらに増加したため、成績上位層であっても解くのに時間がかかったようである。加えて設問では現代文の小説で求められるような「行間」の読み取りや、登場人物の心情を推し量る問題などが出題され、高得点がとりにくい出題となった。

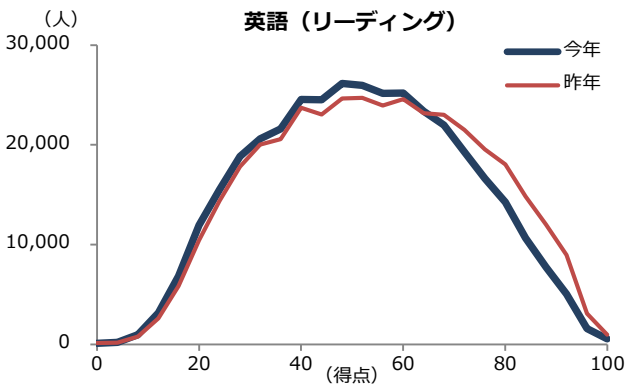
©Kawaijuku Educational Institution.

＜図表３-１＞共通テスト　主要科目平均点

教科・科目名		平均点		
		2023年度	2024年度	差
英語　リーディング		53.81	51.54	-2.27
英語　リスニング		62.35	67.24	4.89
数学	数学Ⅰ・数学A	55.65	51.38	-4.27
	数学Ⅱ・数学B	61.48	57.74	-3.74
国語		105.74	116.50	10.76
理科①	物理基礎	28.19	28.72	0.53
	化学基礎	29.42	27.31	-2.11
	生物基礎	24.66	31.57	6.91
	地学基礎	35.03	35.56	0.53
理科②	物理	63.39	62.97	-0.42
	化学	54.01	54.77	0.76
	生物	48.46	54.82	6.36
	地学	49.85	56.62	6.77
地歴	世界史B	58.43	60.28	1.85
	日本史B	59.75	56.27	-3.48
	地理B	60.46	65.74	5.28
公民	現代社会	59.46	55.94	-3.52
	倫理	59.02	56.44	-2.58
	政治・経済	50.96	44.35	-6.61
	倫理,政治・経済	60.59	61.26	0.67

※大学入試センター資料より
※2023年度の理科②は得点調整後の数値

＜図表３-２＞共通テストリサーチ「英語」受験者の得点分布



数学では、「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」ともに平均点はダウンしたが、難問と思われる出題はなかった。解き方の方針・問題設定の理解力が必要とされ、数学的な思考力を問うことに重点を置いた問題が出題された。

「国語」は、漢文以外では複数文章の関連づけの負担が減った。読解自体に時間をとることができる出題となり、平均点は約10点アップした。

昨年難化し、得点調整の対象となった「生物」だが、今年は易化した。考察問題の出題が減り、標準的な知識問題の割合の増加が要因とみる。

地歴では「日本史Ｂ」で平均点がダウン、「地理Ｂ」でアップした。複数の資料や会話文などから必要な情報を読み取り、知識と結びつけ総合的に判断する傾向は変わらなかった。公民は「倫理,政治・経済」を除く科目すべてで、平均点がダウンした。

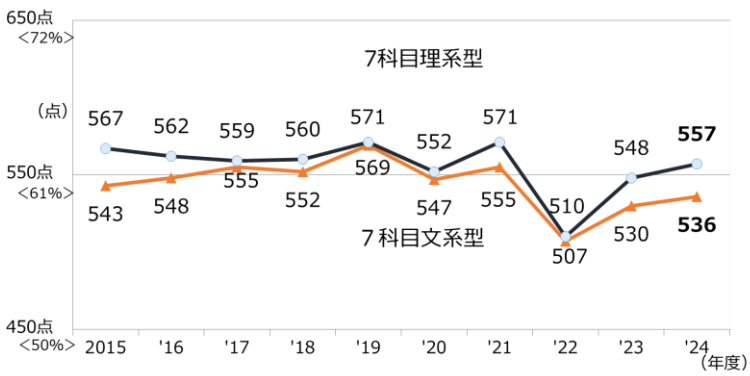
共通テストは、一昨年の数学難化や、昨年の理科の得点調整など、当初は難易度の調整に苦心する様子がうかがえた。本年度は全体的にしっかりと対策してきた受験生にとっては、比較的努力が実りやすい出題であった。

７科目型平均点
文理ともにアップ

＜図表４＞は河合塾が推定するセンター試験・共通テストの７科目型平均点の10年間の推移である。

今年の平均点は７科目文系型（900点満点）が536点（前年差＋６点）、７科目理系型（900点満点）が557点（前年差＋９点）と、昨年に引き続きアップした。徐々にセンター試験時の平均点の水準に近づいてきた印象である。

＜図表４＞センター試験・共通テスト　７科目型平均点の変化



※総合型平均点は河合塾推定
７科目文系型（900点満点）：英・数（2）・国・理（1）・地公（2）
７科目理系型（900点満点）：英・数（2）・国・理（2）・地公（1）
理科①は２科目を１科目とみなして集計
※過去の平均点は得点調整後の数値
※2020年度まではセンター試験の数値で、英語は筆記＋リスニングの250点を200点に換算して集計

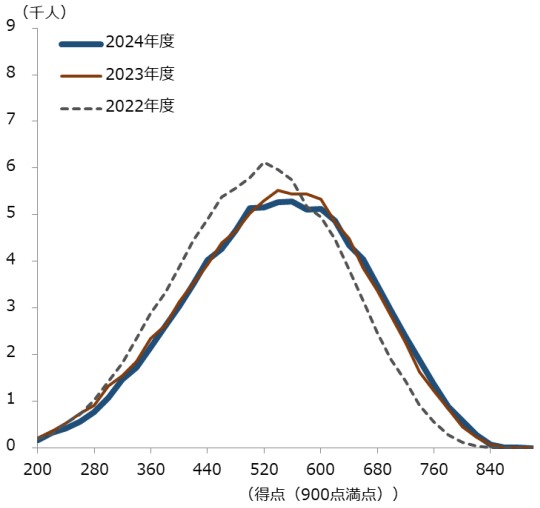
得点分布
高得点層が増加

＜図表５－１＞は河合塾が実施した自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の得点分布である。多くの国公立大で必要となる７科目の受験者の得点分布は、文系型、理系型ともに得点率８割以上の受験生が前年から約１割増加した。英語リーディングや数学では高得点層が減少したが、国語をはじめとしたその他の科目で押し上げる形となった。６割以上８割未満の中間層は文系では微減、理系は微増にとどまっており、大きな変化は見られなかった。

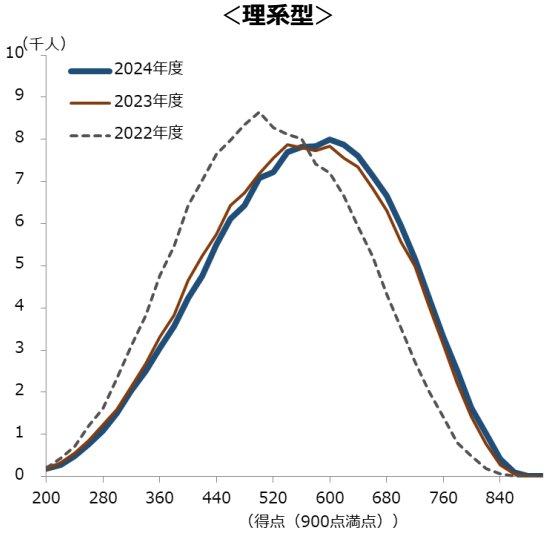
©Kawaijuku Educational Institution.

＜図表５－１＞ 共通テストリサーチ 受験者の得点分布
７科目 受験者の得点分布

＜文系型＞



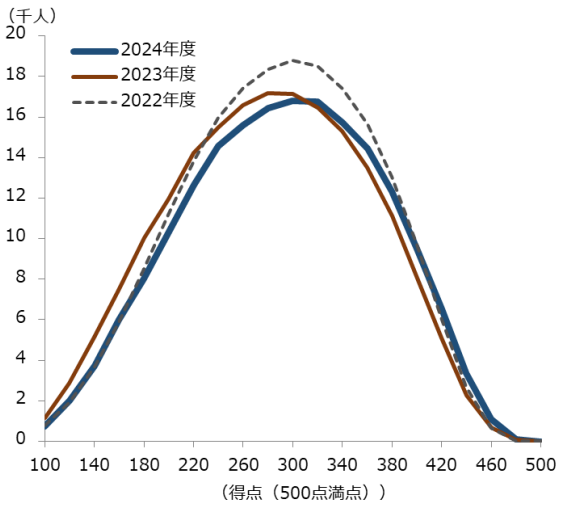
＜理系型＞



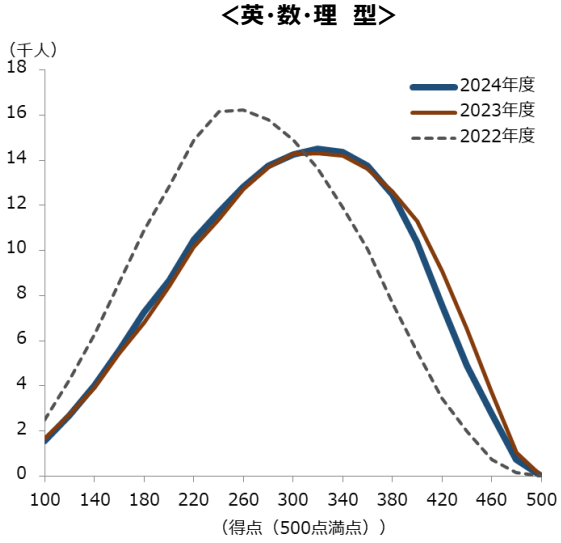
※2023年度は理科②は得点調整後の数値

＜図表５－２＞ 共通テストリサーチ 受験者の得点分布
３科目 受験者の得点分布

＜英･国･数or地公 型＞



＜英･数･理 型＞



※2023年度は理科②は得点調整後の数値

＜図表５－２＞は、主に私立文系志望者が利用する「英・国・数または地公」の３教科型と、私立理系志望者が利用する「英・数・理」の３教科型の得点分布を作成した。２つのグラフともに分布が2年連続で小さくなっているのが特徴だ。冒頭でお伝えしたように、私立大志望者の共通テスト利用が継続的に減少していることがわかる。

「英・国・数または地公」型の平均点は前年から10.5点アップしており、国語の平均点アップが影響していることがわかる。一方、「英・数・理」型の平均点は前年から4.5点ダウンした。同じ理系でも７科目理系型の場合、国語の影響で平均点はアップしたが、こちらは、数学の平均点ダウンの影響がでた。

©Kawaijuku Educational Institution.